

・ SAJ (ステップファミリー・アソシエーション・オブ・ジャパン) の歩み

- オンライン上に生まれた当事者によるサポート組織はどう作られてきたか -

この章では、今回の調査協力団体であり、ステップファミリー当事者たちが中心となって運営しているサポート組織である SAJ (ステップファミリー・アソシエーション・ジャパン)¹ について、これまでの活動の経緯と組織としての特徴についてのべていくこととしたい。

ところで、SAJ のほかに、現在わが国には、ステップファミリーをサポートする複数の活動や組織が存在している。具体的には、SAJ より数ヶ月早く生まれた継母を中心とする当事者グループである「サークル・ベルメール」、不定期ではあるが、ステップファミリーに関する意見等を盛り込んだメールマガジンを発行している「Hop Step Family」のほか、ステップファミリーの当事者である人たちが運営しているオンライン上の個人による複数のホームページが存在している。²

オンライン上の医療・福祉分野におけるサポート活動や当事者グループは、わが国にも多数存在しており、その領域も子育て関連、障害児・者やその家族、難病患者、不登校や引きこもりの人々、シングルペアレント等、その種類も多岐にわたっている。³ このような組織や活動において、ステップファミリーのサポート組織や活動は、他の多くの家族や子育てなどのサポート組織とは異なる発展の経過を辿ってきたといえる。それは現在存在しているステップファミリーのサポート活動のほとんどは、その活動の出発がオンライン上で初めて生まれているという点にある。われわれが知る限りにおいて、こうしたオンライン上の活動が生まれる以前は、現実のコミュニティにおいては、ステップファミリーを対象としたサポートグループはわが国では存在しなかったと考えられる。一方他の多くのオンライン上の活動や組織は、すでに既存のコミュニティにおいて組織化され、一定の活動を経験したのちに、オンライン上に HP を開設したり、会議室、メーリングリスト、チャットなどによるメンバーの交流を開始するなど、バーチャルコミュニティでのサポート活動を開始したものが多。⁴

現実のコミュニティに既になんらかのサポート組織や活動が存在しているか否かは、そこに参加する人々にも、オンライン上のサポート活動や組織そのものにも、大きな違いをもたらすことが予測できる。例えば、少なくとも、オンライン以外のコミュニティから発生した当事者グループのほとんどは、自分と同じ当事者の存在を具体的に認識している。つまり「メンバーは、グループを形成する以前に同様の状況にある人々に出会っているのが通常である。例えば、精神障害者はグループの中で精神障害者に初めて出会うのではなく、精神病院等の治療機関ですでに出会っている。彼らは自分たちが社会の『少数者』であると気づくかもしれないが、少なくとも同様の体験をしている人が他にもいることを知っているのである。」⁵ という状況にあり、自分と同様の体験や特徴を持つ人が現実の社会

に存在していることについて体験している。しかし、まったく既存のコミュニティにそのような活動や組織をもたない、ある特徴を抱えた人々は、オンライン上の出会いによって、初めて自分が孤立した存在ではなく、「少数者」であることに気付くのである。岡はこのようなオンライン上の新しいサポートグループの存在意義を以下のように述べている。

「こうして多くの人が自らに固有であり、他の人とわかちあえないと思い込んでいた『ニーズ』を情報技術によって公言し、そのことによって『孤立者』から『少数者』へと変わっていくかもしれない。そうすれば、結果として社会の中により多くの『少数者』が現れ、多様な生き方に対してより寛容な社会が出現するかもしれない。」⁶

ステップファミリーの当事者活動の経緯を振り返ると、多くの当事者たちが、まさにこの『孤立者』から出発し、同じ体験をしている人の存在をバーチャルなコミュニティに探索するプロセスからその活動を始めている。その出発点は、ほとんどのステップファミリーたちにとって、まだ数年前（おそらく1999年前後）のことである。少なくとも、この数年、SAJを中心とするステップファミリーのサポート活動は、オンライン上からスタートし、かなりのスピードで活動を展開し、その活動内容を広げてきた。2002年度からは、実際のコミュニティにおいても、SAJは定期的なセルフヘルプグループ活動を関東と関西でスタートさせている。この活動により、バーチャルなコミュニティでの交流を経ずに、リアルなコミュニティでのサポート活動から、同じ仲間と出会い始めたステップファミリーたちも出現しつつある。

また、多くのマスコミがこの問題を取りあげ、2002年度の厚生労働省科学研究「子ども家庭総合事業」の研究課題の一つに、「ひとり親・再婚家族に関する研究」という項目が加わったことなどをみると⁷、短い期間にこれらの活動は、少なからず彼らを取りまく実際の社会に変化をもたらしてきているともいえる。

現実の社会の中には存在しなかったサポートを、オンライン上からスタートして、どのようにステップファミリーたちがつくりあげてきたのか。ここではSAJの設立までの経緯と今日までの組織の発展過程を振り返り、その特徴を考察していきたい。

1. 設立までの経緯

SAJの代表である春名ひろこさんによれば、ステップファミリー関係のオンライン上での交流やサポート活動が始まったのは、1999年頃であるという。「再婚サン、いらっしゃ〜い」という中学の教師であり再婚を経験した女性がホームページを開設したものや、ステップマザーたちがそれぞれ開設した「ステップマザー119」、「TUGUMI」、シングルマザーから子連れ再婚した女性が開設した「Step - Family」など、複数の個人運営によるステップファミリー関連のホームページがこの時期オンライン上に登場している。これらのHPを開設したステップファミリーの一人は、われわれのインタビュー⁸に対して、この時期以前の状況を以下のように述べている。

「私が HP を立ち上げるまで、本当になかったですね。育児のページとかはいろいろあったんですよ。でもいろいろ相談したくても、結局自分が継母だってことを言わなければ、何の話にもならないんですよ。だから実際に付き合ってる人とかもそうなんですけど、私の事情を知らなければ、結局何を話しても、通じないっていう思いを何度もしたんで、こりゃだめだと思って。当時、友達が趣味の HP を作ってて、そのページを見て同じようにその趣味を考えている人がいっぱい集まっているんですよ。『あ、これは使える』ってそのとき思ったんですよ。インターネットは、友達というか、知り合いを選べる媒体だなと。『私以外にも絶対継母っているはずだ』ってその時思って、ちょっと自分のこと書くのはいやだったんですけど、それを書けば絶対誰かは寄ってくるっていう確信はあったんで、始めようと思ったんです。」

こういった個人が運営する HP が、時をほぼ同じくして作られ、そこに次第にステップファミリー当事者たちが集まり始めるようになる。しかし当時は、ステップファミリーという言葉自体を本人たちもほとんど知らなかった状況にあり、ネット検索で「継母」と入れても無関係の情報しか得られず、こういった HP を作ってもダイレクトには当事者が集まるということではなかったようだ。

「まず閉じた形で初めました。いろんな人が来てしまったら、これは何批判されるかわかんないなっていうのがあって。最初いろんな悩みを集めている掲示板のところについて、そこに『私は継母です。お友達になりませんか』って書いたんです。そしたら 1 週間くらいの中に 2、3 通メールが来て、その人たちだけに HP のアドレスを教えました。その方法をしばらくとって、固定して 5、6 人の人が来るようになって。そのうち、いろんな継母の人が集まって、けっこう掲示板とかに書き込んでくるようになって、私ひとりじゃなくて、私のほかにも何人かも同じように考えているっていう感じになってきて、それで関係ない人がきても、私ひとりが攻撃されるんじゃないかと、一つの現実としてみてくれるんじゃないかとその時思って、YAHOO の方に自己推薦で載せてくださいってお願いしてみたんです。他の HP だとなかなか載せてもらうのが大変みたいなんですけど、あっさり載せてもらったんですよ。それでだれでも『継母』で検索したら、すぐ迷わず来てもらえるようになりました。」

このように、社会の中に潜在的に存在していたステップファミリー(特に継母を中心に)たちが、オンライン上で出会い、HP への書き込みと応答のやりとり、あるいは個人的なメールの交換が活発になっていき、そこからいくつかのグループが生まれていった。こう

いった継母間の交流は、次第にオフ会などを通してリアルな交流へと発展していった。

「メールや HP を通してお互いの状況は知ってるんで、持ってる辞書が同じなんですよ。だから一つのことを言っても、解釈の仕方が全員一緒なんで、ものすごく話しやすかったですね。『困る』って言われても、その困るの中の何が困るのがわかるんで。そのうち、メールでは必要なことだけ話すっていう感じになっていきましたね。会って話す方が楽しいってわかっちゃったから、あえてメールで話さないっていう。メールはあくまで事務関連だけ話せばいいやっていうような……。」

さらに 3、4 名の継母が中心となり、継母の会を開こうという機運が高まっていく。1999 年の 11 月には、何回かのオフ会をもとに継母たちを発起人として、会員相互では住所や氏名を交流しあい、オンラインの掲示板だけでなく、会報の発行やオフ会の開催などを行うサポート組織である「ベル・メール」を立ち上げることとなった。

SAJ は、上記のような形で生まれたサポート組織とは多少異なる設立経過を持つ。⁹SAJ 代表の春名ひろこさんが、再婚したのは 2000 年の 4 月である。彼女は離婚、夫は死別により、双方が実子をそれぞれ一人ずつ連れての再婚家族であった。それより 1 年ほど前、結婚を前提として付き合いはじめると、彼女も特に継母として、子どもとの関係に深い悩みを抱くようになる。このことについて夫とも話し合い、児童相談所や保健所など専門機関での育児相談も受けたようである。しかしこれらの専門機関では、本音を話せるだけで、継親子関係に関しての適切なアドバイスを得られることができなかったという。

再婚の約半年前の 1999 年 10 月に、NHK の番組で、アメリカのステップファミリーに関する状況が放映された。そこでアメリカでは、40 年以上の歴史をもつステップファミリーのサポート組織である「SAA」があることを知ることとなる。早速彼女は、パソコンを持つ友人に頼み、「SAA」を検索し、SAA の HP のコピーを読んだ。しかし、こういった英語の HP を読んでも、当時はまだ再婚前だったこともあり、ピンとはこなかったと春名さんは言う。

「ステップファミリーといっても、いろいろな形態があるのだな、と思いながらも、その頃は自分の悩みに当てはまる記述しか目に入らず、本も取り寄せて読みましたが、死別後再婚した継母に関係するところのみを読んでいました。インターネットを通じて質問やアメリカのステップマザー（継母）ともいろいろアドバイスをし合えるコーナーもあったのですが、そんな事情を英語で書けるほどの気力もなく、外側から見ているだけでした。」

また、2000 年になり、自らパソコンを購入すると、先に述べたこの頃開設されたばかり

の、いくつかの日本のステップファミリーたちの HP も閲覧した。それらの HP 内の掲示板では、ステップファミリー独特な悩みが語られ、その悩みについて当事者間で分かち合う内容の書き込みが多くなされているのを目にした。しかし一般的に掲示板では、一つの悩みに対して、それに共感する意見が次々に書き込まれ、時としてその内容がより強化されて、一方的な論調が強まっていく傾向もあり、違う角度からの意見を書き込むことの難しさを感じたという。またこういった当事者間の悩みを人目にさらすことは、一方で第三者を傷つけることになったり、偏見をうらづける材料を提供することに繋がるのではないかというリスクも感じたという。

2000 年夏、SAA の HP 上で春名さんは、アメリカでの継母のリアルコミュニティでのセルフヘルプグループ開催の案内に出会う。

「そのホームページの中に、9 月 15～17 日、コロラド州ロッキーにてステップマザーのセミナーがあるという情報のページがありました。クリックすると、ロッキー山脈にある YMCA の施設の写真が大きく表示されるのです。インターネット初体験の私にとっては、ドラえものの『どこでもドア』のように、その空間にスーッとテレポートしてしまうくらい臨場感があり、今更ながらにインターネットという文明の利器にカルチャーショックを覚えました。」

彼女は、単身アメリカに渡り、このステップマザーのリトリートプログラムに参加する。このアメリカのセルフヘルプグループとの出会いが、SAJ 創設への直接的な契機となる。アメリカでの当事者のファシリテーターが運営するセルフヘルプグループでの体験が、春名さんにとっては、それまでとは異なる「先に見えるサポート」となったといえる。アメリカではじめて、彼女はステップファミリー当事者として、これからの自分の進む方向をしめしてくれる「ロールモデル」の存在を見出し、必要な支援に出会うことができたのではないだろうか。

ところで、これまで諸外国の新しいセルフヘルプグループ等の情報が当事者に紹介されるには、そこにその必要性に気付く専門家の介在が不可欠であった。しかし、IT の発展は、問題を抱えた当事者が、ダイレクトに必要なかつ最新の情報を得ることを可能にし、自分たちに必要なサポートが他の国には存在していることに気付き、それに接近することができる道を開いたといえよう。

帰国すると、彼女は実際に会ったアメリカの継母たちの紹介をとおして、SAA の創設者のヴィッシャー夫妻や現在のプレジデントとメールでの交流を開始する。40 年前に SAA を創設したヴィッシャー夫妻からは「自分たちが 70 年代にアメリカで SAA を始めたときも、何もサポートは他に存在しなかった。再婚から 18 年後、我が家のリビングルームでのミーティングから始め、全米組織に発展した。死別、生別、母子世帯、父子世帯、子連

れ同士の再婚か、初婚、再婚か、子どもの性別や年齢の差など、ステップファミリーは多様である。彼らにかたよらない情報を提供することを目的とした、多様なグループの総合体が SAA である。」という言葉ももらい、心に響いたという。一方で、現在の代表であるマージョリー氏からは、会をたちあげる場合の具体的できめ細かいアドバイスももらった。

さらに彼女は、SAA を目標にステップファミリーのサポート組織の 2001 年からの創設をめざし、様々な設立のための活動を具体的に始めた。まずは SAA からのアドバイスのひとつであった「ステップファミリーに関する調査や研究のための協力者として、大学などの研究者とむすびつく必要性」を模索することとなる。これもインターネット検索をたよりに、ステップファミリーに関心を持ってもらえそうな、家族に関する研究をしている心理、社会学者を中心に、会の創設に協力を依頼する電子メールを送付した。その呼びかけに最初に答えたのが、われわれの研究プロジェクトのメンバーである明治学院大学の野沢教授であった。

また一緒に組織を立ち上げる当事者の仲間として、ネットを通して知り合ったベル・メールの創設スタッフである継母の人たちとも実際に 11 月に会い、設立準備のための委員会のメンバーとして協力しあうこととなった。そして 2000 年の 12 月 30 日に 6 名の当事者により、SAJ の準備委員会を設立し、「Stepfamily Web」という名のサイトを立ち上げることにこぎつけた。このサイトは、準備委員のステップファミリー当事者の中に、ウェブデザイナーを仕事としている人たちがおり、彼女たちの技術が大いに生かされている。サイトには SAA の設立者であるヴィッシャー夫妻からのメッセージを掲載し、さらに SAA の HP ともリンクをはり、設立にいたる春名さん自身の経過を、詳しく記載した。また同時に、ステップファミリーのための BBS (掲示板) を設置した。この BBS は、当初から公開された形で始められ、多様なステップファミリーメンバーの参加 (特に男性) を視野に入れ、「継父のいる家族」「継母のいる家族」などのコーナーに分けて、それぞれの立場の人たちが意見や情報を見やすく、書き込みしやすい工夫をしている。それぞれのコーナーに「喜びを感じること・うれしかったこと」という項目を設けて、悩みやストレスに関する書き込みのみでなく、ステップファミリーとしてのポジティブな体験についても書き込めるようにしたことなど、この頃から、SAJ の活動の方向性が、鮮明に打ち出されているようにみえる。

さらに Web 上でのサポート活動の開始と同時並行的に、ヴィッシャー夫妻の著書である *How to win as stepfamily* (邦題『ステップファミリー：幸せな再婚家族になるために』¹⁰⁾) を翻訳し出版する計画を立て、翻訳を仲間たちと始めるかたわら、出版社探しを始めた。この本の出版社が決定し、出版の交渉のために上京した時期に、われわれ研究プロジェクトとの最初の会合を持つに至ったのが、2001 年 2 月のことであった。ここでは、2001 年中にステップファミリーを対象とした全国規模のアンケート調査を協力体制のもとに実施することが確認された。また研究メンバーの茨木、野沢がおもに、今後の SAJ の組織運営のアドバイザーとして協力することもあわせて確認された。

HP を立ち上げて、4 月になると YAHOO の推薦 HP として Stepfamily Web が掲載されたことや、共同通信の配信記事によって地方紙に断続的に記事が掲載され、そこに HP の URL が記載されたことなどにより、アクセス件数は 7 月初旬には 1 万件をこえた。また HP を立ち上げて数ヶ月の間に、その内容に賛同したステップファミリー当事者の数名が、春名さんに電子メールでアクセスしてきた。これらの人々の何名かは、夫婦単位で連絡をしてきているが、現在 SAJ の運営スタッフの中心となっている。彼らは全国各地に離れて居住しており、(外国に居住している人も含めて)運営スタッフの多くが顔を合わせることができたのは、SAJ 設立後の 2001 年 7 月に愛知で行われた家族の合宿旅行であり、さらに、ほぼ全員が対面し話し合いの場を持てたのは、11 月に実施されたマージョリーさんの講演会の際であった。それまでのほとんどのスタッフ間の連絡は、電話、メール、スタッフ専用の掲示板、チャットなどを通してであり、運営スタッフ間の事務的な連絡などのコミュニケーションは、現在もその大部分がオンライン上で行われている。

2 . 設立から今日までのあゆみ

5 月には、7 月の「ステップファミリー・幸せな再婚家族になるために」が出版にあわせて、アンケート調査依頼の差込ハガキの内容や、SAJ の今後の活動計画についての打ち合わせのために、再び上京した春名さんと明学スタッフ間で研究会がもたれた。その際、春名さんから、「社会にステップファミリーの認知を広げていくために、ステップファミリー当事者のネットワークをつくることとともに、それを支援していく専門家のネットワークも形成していくこと」が、SAJ のミッションとして示された。この間、大阪ボランティア協会に、SAJ の組織運営のあり方についてアドバイスを求めるなどして、組織としての規約やメンバー構成、中長期計画などのいくつかの点について、主にネット上において運営スタッフ間で話し合い、明確化していった。

2001 年度の活動計画としては、 ヴィッシャー夫妻の本の翻訳とその出版、 出版記念としてヴィッシャー夫妻の来日記念講演と SAJ メンバーとの交流、 SAJ の正式発足と会員の募集、 ニュースレターの発行、 BBS を中心とした Web 上の交流、 地域別のセルフヘルプグループ (LEAVES) 活動のための準備、 ステップファミリー調査への協力、 広報活動の展開、 が掲げられた。

11 月にヴィッシャー夫妻の来日講演を企画するにあたって、資金を獲得する必要性が生じた。また実際に、SAJ を組織化し、具体的な企画をすすめるために、その運営についての最低限の資金も必要となってきた。会の活動が活発になり、具体的な打ち合わせが必要となってきたこの時期は、電話や郵送料、交通費、その他様々な資金が必要となり、個人の負担だけにたよることには限界がみえてきた。そこで、資金獲得のための財団等への助成金申請活動が、この時期からスタートする。しかし実際には、初年度は申請した助成金の大部分は、会としての活動実績不足などの理由で採用されず、助成金を獲得することができなかった。唯一、経済産業省が行っている「介護子育て分野における革新的なサービス

提供に資する「IT活用事業」¹¹のモデル事業の一つに選ばれ、初年度の活動資金として100万円を取得することができた。

6月25日には、SAJを組織として正式に立ち上げ、会員の募集を開始した。代表には春名さんが就任し、組織としては運営委員会方式をとり、運営委員には、9名の当事者会員（うち3組が夫婦での参加）、2名のサポート会員（1名は編集者、1名は大学教員）で構成された。会員は、正会員（ステップファミリー当事者）、サポート会員（関連する専門家）賛助会員に分けて、会員募集を行った。ただ正会員には、現在は再婚していないが、将来的にステップファミリーになる可能性のある人も含まれるということになっている。

正会員・・・・・・・・・・・・・・・・本会の目的に賛同して入会した当事者、及び将来
当事者になる可能性のある者

サポート会員・・・・・・・・・・・・・・・・本会の主旨に賛同する専門家

賛助会員・・・・・・・・・・・・・・・・会の主旨に賛同する 以外の個人

11月の講演にむけて、東京、大阪での会場の確保や参加者募集のためのチラシの作成、チラシの配布などの作業が運営委員を中心に行われた。講演にむけての広報活動等の準備のために、特に関東、関西の会員は、ネット上だけでなく直接顔を合わせて打ち合わせを行う機会を持つようになっていった。

9月には、ヴィッシャー夫妻の講演にむけて申請していた助成金申請が不採用との決定を受ける。さらに10月にはエミリー・ヴィッシャーさんが急逝するという不幸な出来事が重なった。しかし急遽、現SAA代表であるマージョリー・エンゲルさんが代わって来日していただけることになり、11月3・4日（東京）にて、当事者、専門家向け講演会を2回、11日には尼崎市にて当事者向け講演会が実施された。また来日中には、運営委員とエンゲルさんの交流会も行われ、SAAのこれまでの活動の経過や具体的なプログラムについて、エンゲルさんからの豊富な資料による説明がなされた。当初、講演会はそれぞれ100名以上の参加者を想定していたが、ネットを通じての宣伝、マスコミ等による紹介だけでは、あまり参加者は増えなかった。しかし、この講演参加者や会員の募集にむけて、それぞれのメンバーが講演のチラシやSAJのパンフレットを地域の女性センターや子育て支援センター等に持参し、置かせてもらうなどの、現実のコミュニティでの地道な草の根活動がこの計画を契機に展開された。児童や家庭問題に関する専門家については、この問題に関する関心は思った以上に薄く、特に専門家向け講演では、児童相談所や子育て支援センター等にもチラシを配布したがほとんど反応はなく、むしろ家族に関する法律の専門家や、家族社会学の研究者などの参加が目立った。

ところで、エンゲルさんの来日の大きな意義は、ステップファミリー当事者にとって、組織の将来像として、SAAの組織や活動内容を具体的に知ることができたことと、ステップファミリーの当事者であり、かつ専門家として活躍するエンゲルさんにロールモデルを

見出すことが出来たというところにあるのではないだろうか。彼女は当事者として力をつけていくこと、当事者がステップファミリーの認知を社会に対して訴えていくことの重要性を、スタッフミーティングでは力を入れて話されていた。

その後、SAJは、次年度からの実際のコミュニティでの対面型セルフヘルプグループ活動である LEAVES の開催にむけて、ファシリテーターとなる当事者の養成、プログラムの開発、資金獲得、参加者への広報活動等に次第に力が注がれていく。この活動のモデルとして、SAA のセルフヘルプ活動のプログラムである「Step Together」が翻訳され、日本の家族の実情を加味しながら、用いられている。

2002 年 1 月に関東、関西で、第一回目の対面グループ活動である LEAVES が開催された。それぞれ参加者は 13 名、16 名で、この半分以上が夫婦そろっての参加であった。第一回目の参加者は、Web 上での BBS などのコミュニケーション（BBS に書き込みをすることはなかったにしろ、見ることはしてきた）の経験者であった。第 2 回目は、4 月にそれぞれ関東、関西で行われた。参加者は、16 名、9 名で、それぞれ半数近くは新たに今回参加した人たちであった。特に関東では、Web 上の SAJ の活動を知らずに、新聞記事などの情報から電話で申し込みをしてきた人も含まれていた。このような人たちは、対面型グループの中で、各自が匿名として、ハンドル名を用い交流していたことに対し、多少の違和感を持ったようである。BBS での交流と、対面型の交流がどのように今後進んでいくのか、そこに参加する人たちは重なり合うのか、それともいずれかの交流にグループが分かれていくのか、これについては、これからの活動の経緯を見守る必要があるだろう。

またファシリテーターを体験した当事者からは、いくつかの問題提起もなされた。例えばあるスタッフは、

「経験的にいうと、BBS では、ある人の書き込みについて、一定のアドバイスを書き込みした方が、相手にとって非常に有効なサポートになる場合が多い。例えば、『私の場合は、こうだった、とか、こういうふうにした』と書き込むことがすごく大事だと思ってやってきた。でも、対面型のサポートでは、まずは共感を示すことが大事で、ファシリテーターはあまりアドバイスや意見を言わないことが原則といわれ、多少混乱した。」

と述べている。BBS での仲間同士での相談活動の方法と、対面型セルフヘルプ活動の共通点と相違点はどこにあるのか。BBS でのサポート活動の担い手と対面型グループの担い手が、重なるのか、異なるのか。またそのサポートの効果は同じなのか、異なるものになるのか。これもまた今後の大変興味深い今後の研究課題であろう。LEAVES の活動は、2002 年度は関東、関西でそれぞれ 4 回の開催が予定され、年度末にはそれぞれの活動の交流会などが計画されている。

資金面では、2002 年度は対面型サポート活動計画を中心に助成申請した結果、いくつか

の助成金を獲得することができた。しかし会員数については、この1年間それほど飛躍的には伸びていない。2002年4月現在、74名(当事者会員である正会員はうち54名)となっている。(ただし、54名の当事者会員の中には、夫婦単位で1名の会員になっている人もいるので、実会員数は若干これより多いが)これをみると、総じてステップファミリー当事者の積極的な組織への参加は、未だ広がっていないともいえる。これはオンライン上の活動では、特に会員にならなくても、BBSへの参加は可能であるし、具体的に会員になるメリットというものを当事者があまり感じていないことによるのかもしれない。また積極的にステップファミリーの会員となり、具体的にコミュニティでの活動に参加しようと思う当事者と、悩みをわかちあうためにWeb上のBBSにやってくる当事者とが必ずしも一致していないということも考えられる。一方で圧倒的多数の潜在的に存在しているステップファミリーたちに、未だ組織の存在が知られていないことの方が、この会員数の停滞については、大きな要因と考えるほうが自然なのかもしれない。いずれにしても、SAJは、組織として誕生して1年足らずであり、その活動は始まったばかりなのである。

3. オンライン・サポートグループとしての特徴

以上、SAJの発展過程を述べてきたが、最後にこの発展過程からみえてきた、オンラインから始まったサポートグループの特徴をあげておきたい。

同じ特徴をもった人を探索するところから活動がスタートするということ

ある問題や特徴を持った人が、そのことをわかちあいたいと思う同じ特徴を抱えた人を一般の社会では見つけにくい状況のとき、オンライン上のコミュニティは有効に機能する。特にステップファミリーのように、本人たちから名乗ることはほとんどなく、その特徴は外部には見えにくい、制度やサービスにも繋がらないし、特定の場所に集うこともないマイノリティにとっては、自分の特徴を名乗り、「孤立者から少数者になる」手段として、オンラインコミュニティの存在は非常に大きい。

結びつく当事者たちの現実のコミュニティでの距離が比較的離れていること

バーチャルな世界の特徴は、現実社会の距離と時間からの離脱が可能な点にある。¹²それはネットによって結びつく当事者たちのオンライン上での距離と、実際のコミュニティでの距離とは異なることを意味する。もちろん会おうとすれば会える距離に居住している場合もあるが、概して国内の各地に散らばって居住しており、ときには海外居住者である場合もある。SAJの場合も、運営委員に海外居住者がいるほか、BBSの書き込みをする人たちの中にも複数の海外居住のステップファミリーがいる。オンライン上でのコミュニケーションにこのことはほとんど影響しないが、そこから現実の社会でのコミュニケーションを始めようとするとき、それは活動の壁となることもある。

身近な地域からスタートし、全国的組織になっていくという従来の当事者活動とは違う

発展経過を辿ること（はじめから否応なく全国組織としてスタートする）

のような過程でメンバーが集まってくるため、組織を形成するときは、はじめから全国組織としてスタートすることとなる。従来のセルフヘルプ活動は、草の根的に身近な地域からスタートし、次第に全国組織に発展していくことが多い。SAJ の場合、まず全国規模でオンライン上での交流が始まり、そこから組織が立ち上がった。次に全国規模のオンラインサポートから、地域ごとに分けてリアルなコミュニティでのサポートグループ作りを意図的に始めようとしている。このようにみていくと、オンラインサポートグループは、従来の「Grass-roots（草の根）」の意味とは異なる発展の方向性をもつように思われる。

BBS 等オンライン上のコミュニケーションでは、匿名での自由なコミュニケーションができるが、一方ではじめからそれは不特定多数の人たちに見られていること

先に述べたように、オンライン上では、距離や時間からの離脱と同様、有名、具体からの離脱も可能となる。オンライン上では、究極の匿名性が保たれ、本人が明かさなければ、生別、年齢、職業のほか、人種、容姿や声など全ての個人的特徴は隠すことが可能である。それがその人の外見や性別、年代にとらわれずに、自由に相手と交流できる効果を生む。しかし一方で、当事者になりすまして、そのコミュニティに参加することも可能にする。また、BBS を公開している以上、そこでのやりとりは、多くの当事者以外の人たち（少なくともそこにアクセスする以上、その内容に一定の関心を示している人たちではあるが）の目にさらされていることにもなる。悩みや苦しみを当事者間でわかちあい、共有する場を異なる誰かに見られていること、また異なる誰かが参加しているかもしれないことは、どのような影響を及ぼすのか。例えば、継子との関係に悩む継親が BBS にありのままにその気持ちを書き込むことが、その問題についての偏見を助長することに繋がる危険性もある。またその書き込みを読んだ第三者の継子を傷つけることになる可能性もある。対面型のグループと異なり、その交流の場は必ずしも安全で守られた場とはいきれない。そのため、その組織のメンバーだけに閉じた形で BBS を運営している場合もあるが、一方で、それは新たな当事者の参加を妨げることになってしまう問題も孕んでいる。

オンライン上のコミュニケーションのみであるかぎり、事務所や場、資金の必要性や負担は少ない。

当事者が自分たちの問題に気付き、同様の問題を持つ人をオンライン上で探索し、そこでの交流をするために、そこに HP を開設し交流することで、問題を分かち合ったり、情報交換をするという範囲においては、そこでは交流する場を設定する必要性もないし、組織の代表を決めたり、事務所を設置したりする必要はない。またそのための資金も必要はなく、最低限の HP を管理するための通信費と労力が必要なだけである。（といっても、この管理にはかなりの時間と労力が必要であるが）しかし、そこから現実に出会うことを開始し、現実の場でのセルフヘルプグループ活動を展開したいということになれば、集う場

所の確保、交通費、それを企画し実行していくスタッフなど、組織としての具体的な人的、金銭的資源が必要となってくる。バーチャルからリアルコミュニティへ活動を展開していくとき、この資源確保という部分が大きな壁となる。

組織としての発展の速度が、通常のコミュニティで発生した組織より非常に早い。

空間、時間からの離脱が可能なオンライン上では、そのコミュニケーションの速度は通常より量質の両面において相当に早い。そこからスタートしたサポート組織の発展過程は、あたかも「早送り映像」のようなスピードで進化しているように見える。たとえば同じステップファミリー組織として発展してきた SAA では、全米的な組織として正式に機能するまでにおよそ 20 年かかっているという。それに比較すると、SAJ のこの 1 年数ヶ月の組織化の早さには驚くべきものがある。例えば対面型のセルフヘルプ活動を全国に展開していくことについても、参加者の募集から会場の確保、グループ活動のプログラム、ファシリテーター間の情報交換など、その全てのコミュニケーションにインターネットという道具が駆使され、数ヶ月の準備期間を経て、少なくとも関東、関西エリアで同時にスタートさせている。もし現在、オンライン上で行っているこのようなスタッフ間の組織運営の活動をこれを用いないで行ったとしたら、時間とそこにかかる人的、金銭的負担は数倍にもなってしまうことだろうし、SAJ の活動のほとんどが成立しなくなるだろう。

一方でこの発展の速さは、組織のこれからにどのような影響を及ぼすのだろうか。少数の核となるメンバーによって、全体の会員数がさほど増えないなかで、SAJ は大規模に活動を展開してきたが、組織としてそれを支える当事者会員の総数をどのように増やしていくべきなのか。SAJ のこれからの課題の一つとなるであろう。

4 . おわりに

以上のように、SAJ の発展過程を事例的に整理、分析しながら、オンライン上に発生したサポート組織の特徴について述べてきた。しかしこれはあくまでステップファミリーという当事者たちのオンライン上のコミュニケーションとそれによって発展してきた SAJ という一つのサポート組織の経過とその特徴である。はたしてこれがオンライン上に発生した全てのサポート組織に共通した特徴であるかどうかについては他のグループの実態などを踏まえて、慎重に検討を重ねていく必要があるだろう。

その他にもオンラインサポートグループの研究課題は複数ある。一つのグループにおいての組織化の過程から導き出されるオンライングループの運営のあり方は、他のグループへの知見となりうるのだろうか。さらにオンライン上のグループ活動は、これまでの対面型セルフヘルプ活動と同様に、個々のメンバーの Well-being やエンパワーメントに有効に機能するのか。それは当事者活動として、具体的な社会活動や変革に結びついていくのか。

SAJ の活動が開始されて、まだ数ヶ月である。他のインターネット上のオンラインサポートについても、インターネットの普及そのものがこの数年のことであり、いずれも設立

してまだ日が浅い。これらの活動の経過を見守りながら、以上のようないくつかのテーマについて、より詳細な研究を続けていくこと、それが今後の課題である。

【注】

- ¹ SAJ については Stepfamily Web (<http://homepage2.nifty.com/stepfamilyweb/>) を参照のこと。
- ² それぞれの HP は以下の URL。「サークル・ベルメール」(<http://www.belle-meres.net/>)
「Hop! Step Family」(<http://members.jcom.home.ne.jp/someko/>)。YAHOO の推薦サイト「ステップファミリー」には、その他いくつかの個人による HP が紹介されている。
- ³ アメリカでは electronic support group (インターネット自助グループ) は、少なくとも 2,000 件以上の関連サイトがあるという報告もある。(阪元章編『インターネットの心理学』p71)
日本での全体的なサイト数は不明ではあるが、この数年インターネットの普及とともに、様々は当事者組織、またそのサポート組織が HP を開設するなどのオンライン上の活動は急激に増加している。
- ⁴ 例えば、日本初の患者家族会の HP を立ち上げた「日本ダウン症ネットワーク(JDSN)」(<http://jdsn.gr.jp/>) は、それまでの各地域での約 80 団体もの親の会の中のネットワークを結び、新たな交流を求めて作られたものであり、リアルなコミュニケーションの体験後に生まれた。
- ⁵ 岡知史「21 世紀のセルフヘルプグループとその調査方法」右田紀久恵他編『社会福祉援助と連携』中央法規出版、2000 年、p103
- ⁶ " p.10
- ⁷ 厚生労働省 HP「平成 14 年度厚生労働科学研究費補助金公募要綱」(<http://www.mhlw.go.jp/wp/kenkyu/koubo02/kh05.html>) 参照。
- ⁸ われわれの研究プロジェクトでは、2001 年 5 月～7 月、アンケート調査に先立ち、数名のステップファミリーの人たちに対して、個別のヒアリング調査を実施した。
- ⁹ 以下の SAJ 設立の経過については、注 1 のサイトに春名さん自身が書いた「ここにいたるまで」の文章と、数回にわたってのインタビューに基づいている。
- ¹⁰ Visher, E. B & Visher, J. S., (1991), *How to Win as a Stepfamily*. Second Edition, Brunner/Mazel.(春名ひろこ監修・高橋朋子訳(2001)『ステップファミリー：幸せな再婚家族になるために』WAVE 出版)。
- ¹¹ この事業については、「わいわい子育てネット」(<http://www.waiwai-wand.com/>) を参照のこと。
- ¹² Phillips, W. (1996). A Comparison of Online, E-mail, and In-Person Self-Help Groups Using Adult Children of Alcoholics as a Model. In *The Psychology of Cyberspace*, (<http://www.rider.edu/users/suler/psycyber/acoa.html>) (article orig. pub. 1996)

【参考文献】

- 内藤まゆみ (2000)「インターネットにおける自助グループ」阪元章編『インターネットの心理学』学文社、pp.72-82
- 岡知史(2000)「21 世紀のセルフヘルプグループとその調査方法」右田紀久恵、小寺全世、白澤政和編『社会福祉援助と連携』中央法規、pp.91-107
- 岡知史(1998)「複雑系としてのセルフヘルプ・グループ - 自律分散システムという新しいモデルの可能性 - 」久保紘章、石川到覚編『セルフヘルプ・グループの理論と展開』中央法規、pp.57-71

-
- 小坂守孝 (1998) 「自分空間としてのネットワーク - 相談する・心の問題へのアプローチ」
川浦康至編集 『インターネット社会』現代のエスプリ .370、至文社
- しんぐるまざあず・ふぉーらむ編著 (2001) 『シングルマザーに乾杯!』現代書館
- 金子郁容 (1999) 『コミュニティ・ソリューション・ボランタリーな問題解決にむけて』
岩波書店
- 百溪英一 (1995) 「障害児者関連 www Home page の役割と現状」日本ダウン症ネットワ
ークホームページ (<http://infofarm.cc.affrc.go.jp/~momotani/tron.html>)
- Phillips, W. (1996). A Comparison of Online, E-mail, and In-Person Self-Help Groups
Using Adult Children of Alcoholics as a Model. In *The Psychology of Cyberspace*,
(<http://www.rider.edu/users/suler/psyber/acoa.html>) (article orig. pub. 1996)